

制作概要

始めて私の作品の中に釘が登場してきたのは、1999年ギャラリーはねうさぎでの個展『胎』であったが、それ以後、釘は私にとっていかなる意味を持つのかと考えてきた。釘を刺すことは、2000年のBOX美術館3「2000平和」での『隠された攻撃性』、2001年ギャラリーはねうさぎでの『表出する深層』を経て、2003年の『Conflict Constellation』となり、その時、それまでの攻撃性は光となり昇華した。

釘を刺すという行為は、針を刺す、棒を刺すと、表現の攻撃性の現れであると考えられるが、それらが美術的に成熟したものが、2001年金沢城址で開催された夢みどりいしかわ2001野外アートコンペティションでのインスタレーション『表出する深層』である。同年の個展とタイトルを同じくするそれは、ギャラリーはねうさぎでの釘球ではなく、2400本の赤い鉄棒を、高さ10m幅85m、高さ6m幅65mの向かい合う二つの石垣に差し込まれたものであった。

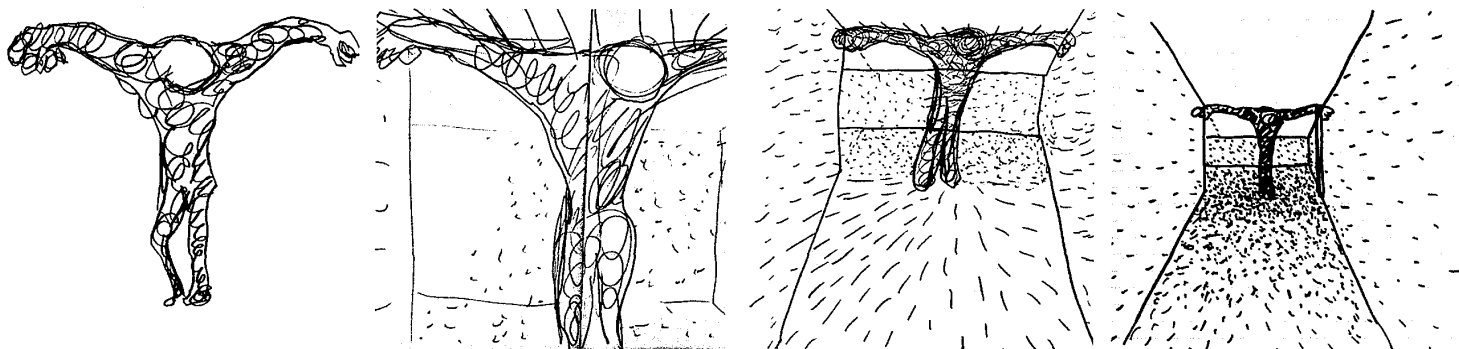
今回の『Installation-Ferita（傷）』は、そういうコンテキスト＝文脈の中に生まれてきたが、ここにはそれまでの攻撃性というものは見当たらない。釘は、見る側に向かってくるのではなく、1本1本それぞれの姿を示している。ただただ静かに〈Ferita〉がそこにあるということを物語るように。

青野 卓司

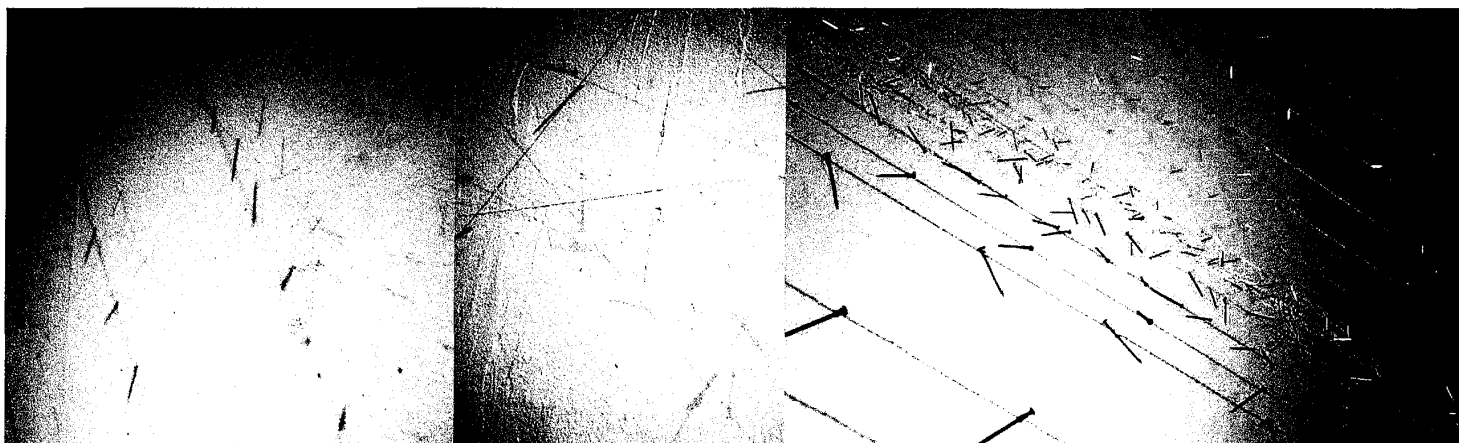
「Installation-Ferita（傷）」

「青野 卓司個展」

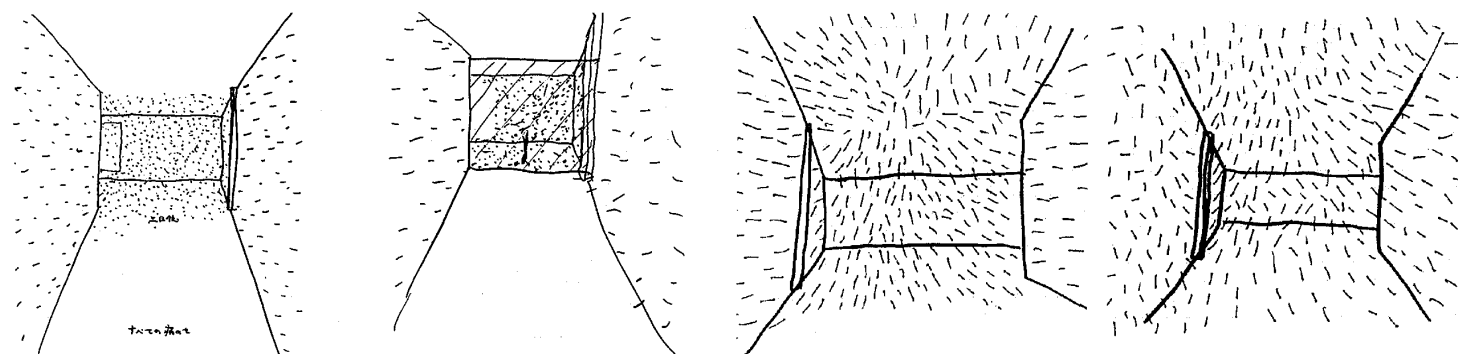
ギャラリーはねうさぎ(京都)



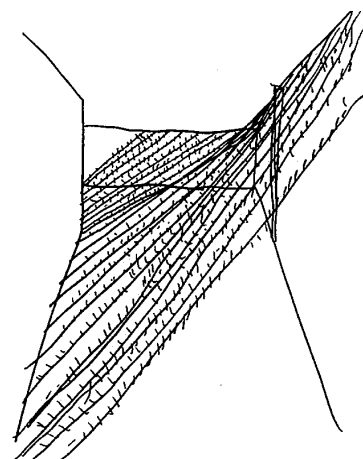
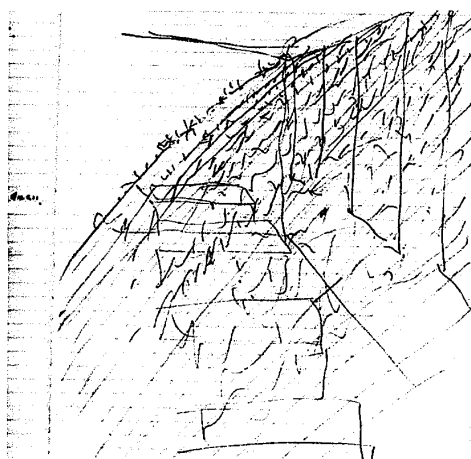
これらのドローイングは意図して描いたものではない。毎朝3頁から10頁余、言葉を書き記すことを続けていることから生まれてきたものである。そこには何があるのか、何が表現されていることを待っているのか、その答えを獲得するために、素材を手に取り技法を通じて表現する。その作業が始まった。

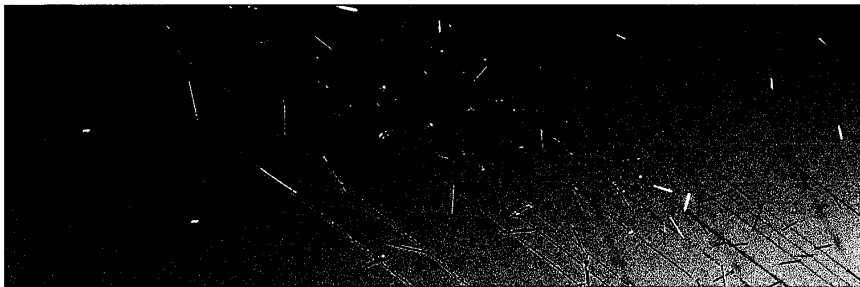
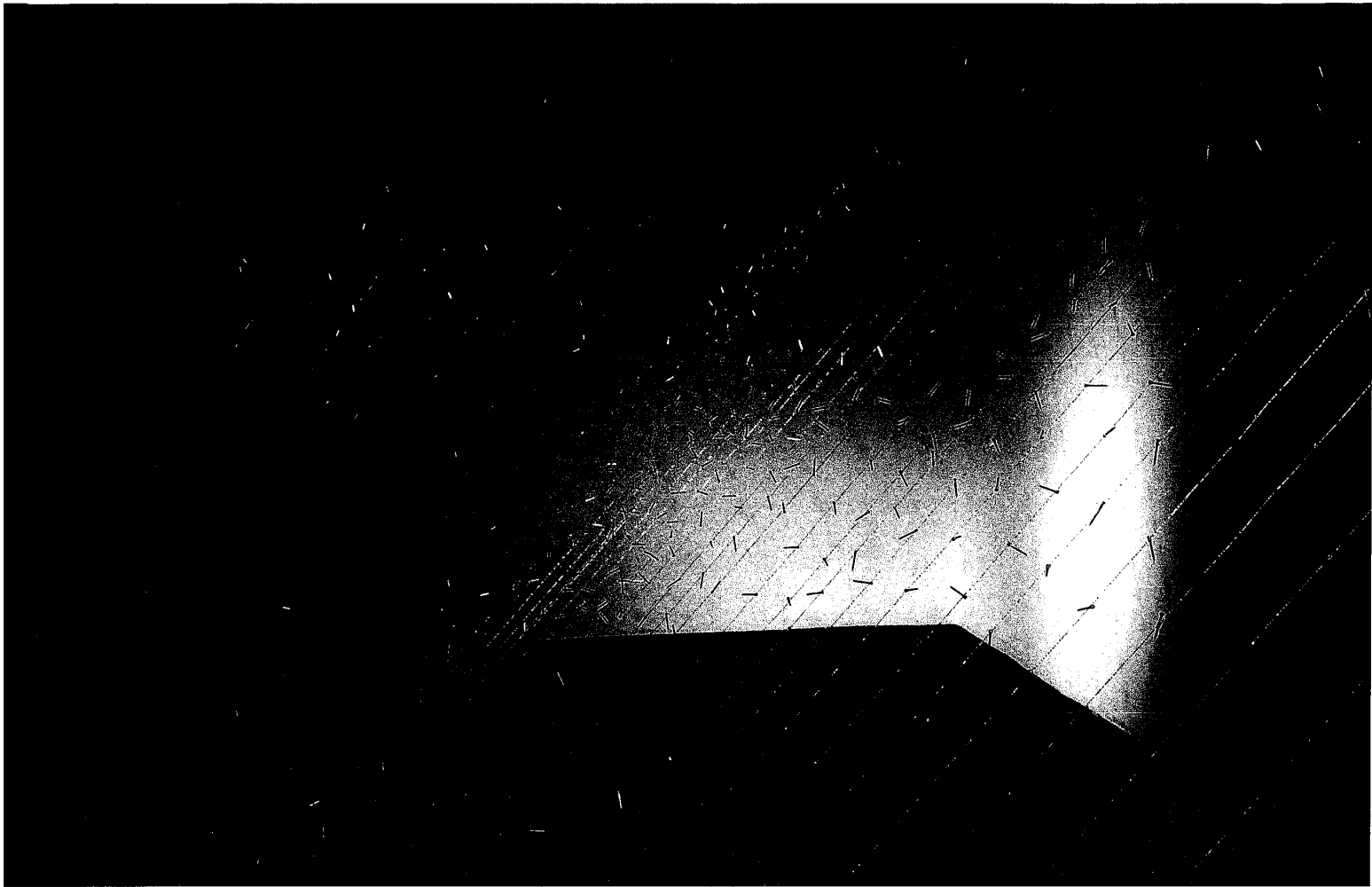


インスタレーションの一部である影。私の作品には、影が大きな要素を成す。ここでは、光輝く表情の背景にあるネガティブな「あるもの」が現れている。



ページ上段のドローイングに基づいた制作を開始して、再び設置を予定する空間と向き合うこととなる。そこで、それまでの3層をなすイメージは一気に統合され、新しい姿が浮かび上がることとなった。





青野 卓司
「Installation-Ferita (傷)」
2006年10月
H 2670×W 4000×D 8000 mm
真鍮釘・針金
ギャラリーはねうさぎ(京都)

